

目次

開催にあたって	3
序 等々力溪谷の形成をめぐって	5
【折込】等々力溪谷概況図	11
等々力溪谷周辺航空写真	12
I 等々力溪谷の形成について	13
II 「姫の滝」の形成過程をめぐって	29
III 溪谷近隣の遺跡	53
附 谷沢川・等々力溪谷の現況	69
引用・参考文献	77

〈コラム〉

コラムⅠ 虚構と真実の間1—「名残常盤記」から逆川のこと	26
コラムⅡ 虚構と真実の間2—「姫の滝伝説」から袖が岩のこと	50
コラムⅢ 逆川の写真	61
コラムⅣ 等々力溪谷の変遷（概念）	66

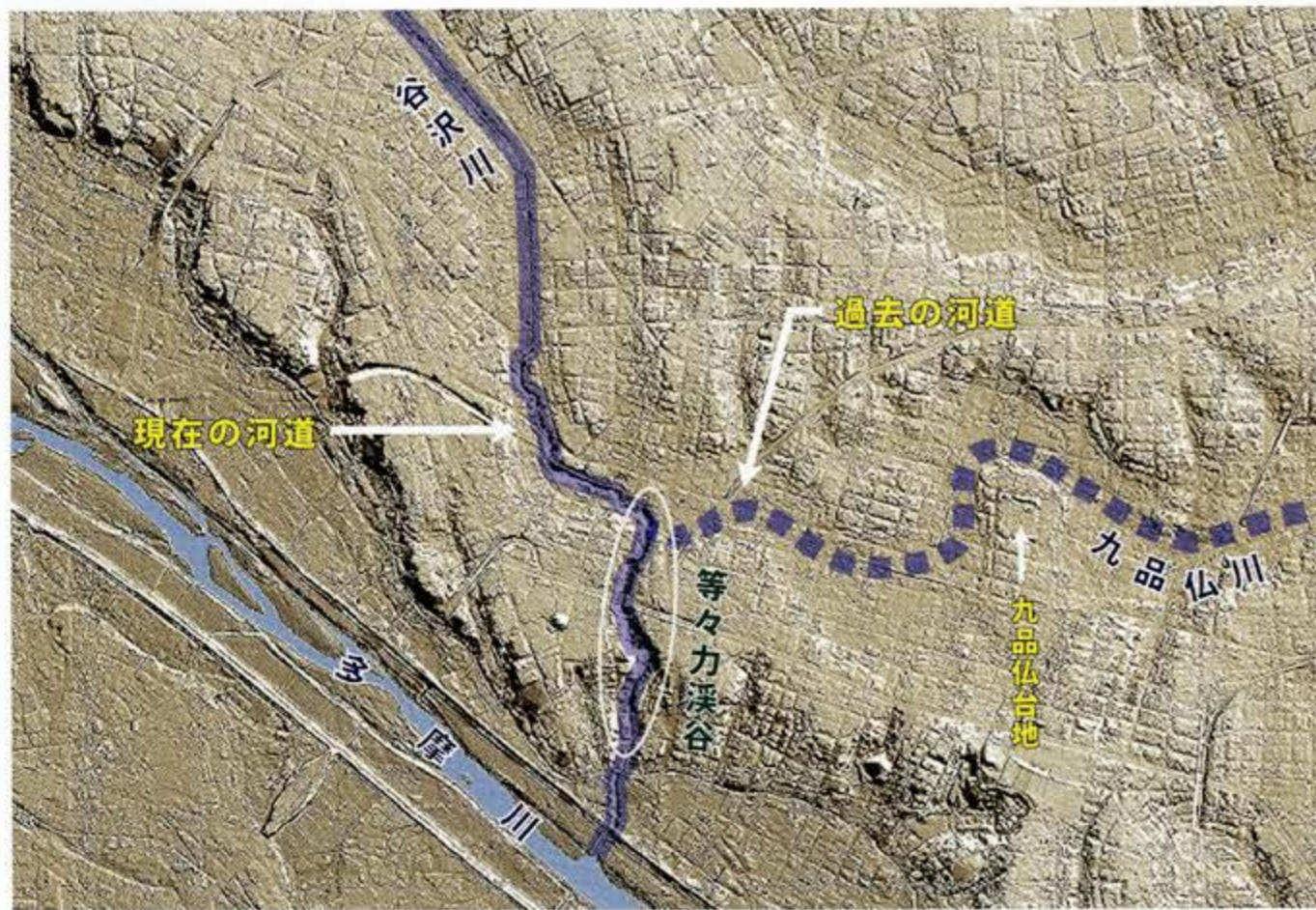
凡例・謝辞

- 1 この図録は世田谷区立郷土資料館が開催する特別展「等々力溪谷展—溪谷の形成をめぐって—」（会期・平成23年10月29日～11月27日）の展示図録である。
- 2 本図録に掲載された資料が、必ずしも展示に出品されるとは限らない。
- 3 本展の企画及び図録の編集は、当館学芸員・高杉尚宏、同・武田庸二郎、当館歴史専門調査員・小林信夫、同・上原智が担当した。
- 4 本図録に掲載した写真の撮影と図版の作成は、主に武田、上原、小林が担当した。
- 5 本図録の執筆は全般にわたって高杉が当たった。
- 6 「谷沢川の河川争奪概念図」、「溪谷近隣の主要遺跡」および「等々力溪谷航空写真3D」の図版作成には「カシミール3D」と「数値地図5mメッシュ（標高）」（国土地理院）を使用した。
- 7 「目黒筋御場絵図」は、国立公文書館のデジタルアーカイブより画像を転載した。
- 8 本図録に掲載した資料は、特記のない限り当館蔵である。
- 9 本展実施にあたり、品川区立品川歴史館専門指導員・富川武史氏には関係史料等についての貴重なご意見を賜りました。ここに記して深く感謝いたします。

序 等々力溪谷の形成をめぐって

序 等々力溪谷の形成をめぐって

世田谷区の東南部にある等々力溪谷は東京都23区内唯一の溪谷で、武蔵野台地の南端を大きく開析して形づくられている。溪谷の範囲（都指定名勝区域）は、東南方向へ流れる谷沢川が南へ方向転換する等々力2丁目39番付近にはじまり、台地が切れて多摩川の氾濫平野に及ぶ手前の矢川橋付近までの約650mに及ぶ。この台地を地形面から



谷沢川の河川争奪概念図

見ると、北側上流の武蔵野中位面（M2）から同下位面（M3 中台面とも）に該当する（折込図「等々力溪谷概況図」参照）。

現在、溪谷内にある不動の滝付近の露頭では、この台地を断ち割った地層の重なりを見ることができる。それは上から下に向かって、黒色腐植土層・立川ローム層・武蔵野ローム層・東京軽石層（TP）・武蔵野粘土層・武蔵野礫層・渋谷粘土層の順に堆積している。また、滝の出水点は武蔵野礫層と渋谷粘土層との間にある。最近の調査では、溪谷内に滝の湧水を含め33ヶ所もの湧水点を確認されており、これらが溪谷内を流れる谷沢川を涵養していることが知られる（世田谷区『等々力溪谷名勝区域保存管理計画』2003）。そして、滝より上流の現・ゴルフ橋下から下流100mほどの間には、東京地域の基盤を構成する上総層群の「高津互層」（泥岩）が見られ、これが下流域では凸レンズ状に堆積している渋谷粘土層のさらに下に埋没している。

ところで、現状では溪谷内を南流して多摩川へ流入している谷沢川も、もとはその東にある九品仏の谷底低地を流れる九品仏川の一部（上流）であったが、南にある不動の滝付近に始まった地下浸透水の谷頭侵食により、徐々に北方向に進行していき、ついに九品仏川まで達した結果、その流れを横取りして（これが所謂「河川の争奪」である）谷沢川となり、さらにそれが溪谷を形成したというように従来より説明されてきた（図「谷沢川の河川争奪概念図」参照）。溪谷より上流の谷沢川が、もと九品仏川の上流に当たるといふ見方の是非については、地形の上からも谷沢川上流と九品仏川の谷底地形が連続していることや、また、近年まで九品仏川の名残川が逆川として等々力溪谷内に流入していた事実などから、首肯し得るものと考えられる。しかしながら、溪谷形成の成因が、地下水の谷頭侵食

I 等々力溪谷の形成について

はじめに

谷沢川は世田谷区桜3・4丁目付近にある荏原台下の湧水を集めて南東へ流下し、下流1kmほどの地点で急に南に流路を変え、等々力溪谷を形成して多摩川へ注ぐ延長5.8kmほどの小河川である(註1)。

従来から、谷沢川はもともとその東にある呑川支流の九品仏川の一部(上流部)にあたり、今見るような等々力溪谷は、いわゆる谷沢川の「河川の争奪」(後述)の結果形成されたと説明されてきた。この「等々力溪谷自然開削説」に対して、近年、地形地質学的見地から、九品仏川の排水改良と水資源の利用(利水)を目的として、溪谷が江戸時代人工的に開削された可能性があるとする見解、すなわち「等々力溪谷人工開削説」が示されるようになった。

しかし、溪谷の開削を人工とする見解において直接的な根拠を提示した例はなく、理論的にその可能性を指摘するにとどまっているというのが実情である。いわば根拠のない推論を重ねているのであり、いささか強引の感は否めない。それにもかかわらず、最近では溪谷の「人工開削説」を恰も自明であるかのように語る例もまま見受けられるようになった。

筆者は必ずしも地形地質学に詳しいものではないが、敢えてこの機会に人文学的な観点から「人工開削説」に対する反証を掲げておきたい。

1 自然開削説と人工開削説

はじめに谷沢川の流路変更について言及したのは貝塚爽平氏である(貝塚1964・1975)。この説では、もともと南の等々力不動の滝の辺りに発した谷頭侵食が徐々に北方向に進行した結果、野毛の台地をショートカットし、谷沢川の流路は南の多摩川へ変更され、九品仏川と分離

(註1) 谷沢川の概要は、「谷沢川の自然—谷沢川調査の記録—」世田谷区都市環境部公害対策課(1980)に拠る。

(註2) 「谷沢川はもとは呑川の支流の九品仏川の上流であったが、等々力付近に南から谷頭侵食をしてきた谷沢川に流水を横取りされたのである。こうして九品仏川の上流を「斬首」した川は水量をにわか増して下刻をたくましくし、等々力溪谷を作ったのである。田園都市線の等々力駅はこの「斬首」または「争奪」現象の現場に近い九品仏川の谷中にある。」(貝塚1975)

なお、本文の中に挙げられた「等々力不動の滝」は、武蔵野中位礫層と東京層上部の粘土層(渋谷粘土層)との間から湧き出ている。

(註3) 「目黒筋御場絵図」は江戸近郊に設けられた幕府御場のうち、目黒筋の村々を克明に記したもので、村名の外、古道・神社仏閣・河川・用水・溜池・橋梁などが克明に記載されており、当時の地誌地勢を知る上で貴重な資料となっている。



「目黒筋御場絵図」(部分) 逆川橋付近

した(これを「河川の争奪」と呼ぶ)と説明する。この見解は、等々力溪谷が自然の営為によって形成されたとする、いわば「等々力溪谷自然開削説」である(註2)。

地形学的な見地からしても、もとは谷沢川が九品仏川と一体の河川であったことはほぼ異論のないところである。それは、かつての流路が荏原台(世田谷では、北東部にある淀橋台とともに最も古い洪積台地。区域中部から南東部にかけて存在している)の南側縁辺に沿って流下しており、上流では東南方向へ、現在等々力溪谷の始まる地点からは東方向へ流れ、九品仏川流路と谷地地形を連続的に共有していること、さらには旧流路の名残川と考えられる逆川(周辺の川が例外なく東流ないし東南方向へ流れるのに対し、この川だけ西流することから命名された)が、近年まで溪谷の始まる付近(現ゴルフ橋付近)で谷沢川へ注いでいた事実などから裏付けられる。

文化2年(1805)に作成された『目黒筋御場絵図』(国立公文書館内閣文庫蔵など)には、実際に逆川が九品仏川と繋がって九品仏浄真寺のある台地を廻り、さらにその東に及ぶ様子が描かれている(註3)。但し、九品仏川はその本流である呑川まで間近に迫りながら(現・奥沢2丁目付近まで)合流には至っていない。また、溪谷の東にあってそれと南北に平行する道(ほぼ現在の用賀中町通り~目黒通りに相当)には逆川に架橋した「逆川橋」という橋が描かれているのが注意をひく。

本絵図から判断する限り、一旦は九品仏川から離れてその名残川としてやがて消滅するはずであった逆川は、その後次第に勢いを増して、逆にその本流筋にあたる九品仏川を「争奪」したと考えざるを得ない。その期間が果たしてどれ程であったかは不明であるが、その間、九品仏川流域はすべて逆川となって溪谷内の谷沢川に注ぐことになり、結果として溪谷の侵食作用をさらに高めた

II 「姫の滝」の形成過程をめぐって

はじめに

ここでは本編第I章に関連する補遺として、かつて谷沢川に実在した「姫の滝」をとりあげる。

戦前まで谷沢川の中流域、野良田（現・世田谷区中町）に実在したという「姫の滝」（「野良田の滝」とも）については、江戸期の文人が記した紀行文や創作民話（註10）、さらには地元の人々の証言などによって様々に語り伝えられる一方、意外にも位置や規模などに関してさえ定見とみるべきものがなく、その実態は必ずしも明らかとはいえない。それは「姫の滝」に関する記録資料の少なさに起因するが、その実態を解明することは、谷沢川や等々力溪谷の全体像を考える上で不可欠な問題をも含んでいる。

ここでは、今は幻の滝となった「姫の滝」の実像について検証するとともに、江戸時代に作成された絵図を紹介し、その形成過程をめぐってひとつの仮説を提示しておきたい。

1 幻の滝

現在、世田谷区中町2丁目38～40番付近の谷沢川中流域には、「姫之橋」が架橋されている。かつて実在した「姫の滝」に因んで名付けられたこの橋が、現在地に初めて架設されたのは昭和16年のことである（世田谷区『土木概要』1969）。すなわち、昭和13年7月に起きた水害のため、この付近にあった「姫の滝」が決壊崩落し、一時は谷沢川の流路もその氾濫によって大きく変化した。折しもその地（野良田区）では、前年より玉川全円耕地整理事業が進められており、翌14年から耕地整理組合がその復旧工事に着手した。偶然にも、当時の水害による川の氾濫の様子とともに、現在の「姫之橋」に通じる位置に川を挟んだ両側から道路を新造していた状況を表示した同年測量の地形図がある（『帝都地形図』第3集 之潮 2005）。

（註10）江戸時代後期の国学者である高田（小山田）与清（天明3・1783～弘化4・1847）の『世田谷紀行』（文化12・1815）には、「姫の滝」について、以下のような描写がある。

「廿一日晴、（中略）蒲田（鎌田）の里、大蔵の里をへて玉川のそ（沿）ひをくだりゆくに、びやうぶ（屏風）などたてたらんごとき岸より、そこひもしらぬ青瀬の見おろされたるは、髪（髪）の毛ふとるばかりおそろし。野良田の滝あはれなるさまにおちたり。をりにふれてはえ（鮫）てふ魚の滝をのほるがきよう（興）あるよし以謙がかたれれど、今日はかけだに見えずていとかひなしや。」（下線筆者『世田谷区史料』第1集より）

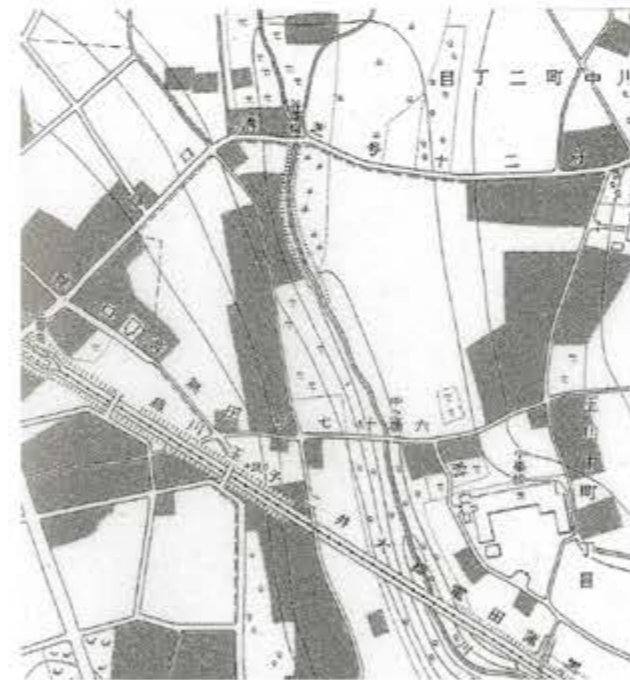
この記述によれば、「姫の滝」が相当の高さ（深さ）を有していることや谷壁が思いの外急峻であったことが印象深く書きとどめられている。

また、「姫の滝伝説」のストーリーは、都より探勝に出た貴公子が、この地の領主の娘であった美しい姫君を見初めて契りを結んだ。やがて貴公子は再会を約して都に去ったが、その後何年たっても貴公子は姿を見せず、悲しみにうちひしがれた姫君は、ついに野良田の滝に身を投げて亡くなった。そこで姫の死を悼んだ人々は、その滝を「姫の滝」、さらにその袖が掛かった岩を「袖ヶ岩」と呼ぶようになった、というもので、滝と岩の名の由来を説く。

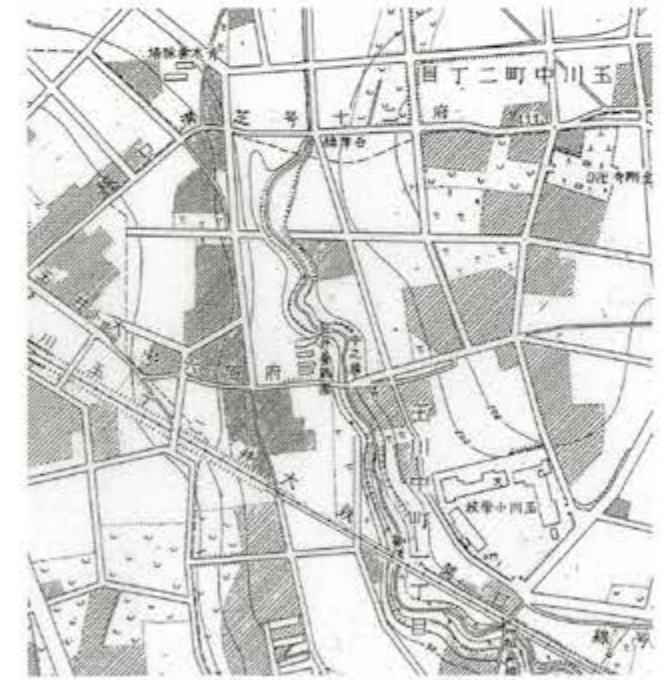
（註11）『帝都地形図』第3集（之潮 2005 井口悦男編）の「玉川」地形図には、昭和9年測量図と14年測量図が所収されている。後者の図では、北側（上流）の「矢沢橋」と南側（下流）の「中之橋」との中間に川を挟んだ東西両側から道路が新造され、これから新しくその場所に「姫之橋」が架設される状況であることが分かる。さらに、矢沢橋より南側（下流）箇所が、水害によって生じた氾濫によって、兩岸の幅が不整形に大きく広がっているのが確認される。災害時のこの箇所を写し撮った写真が玉川全円耕地整理事業の資料（世田谷区立郷土資料館蔵）の中にある（本文後出）。

この『地形図』には、昭和9年測量図と同14年測量図が収められており、両者を比較することによって、水害以前と直後の状況の違いを明瞭に判別することができる（下図参照）（註11）。

冒頭にも述べたように、「姫の滝」については地元の人々の証言や創作民話などで語り継がれる一方、実際にはそれが所在していた場所や規模についても定見がなく、そのことが、今ではまさに「幻の滝」と呼ばれる所以となっている。これまで「姫の滝」の所在地について語られてきたことは、概ね次の3説である。1つは、現「姫之橋」がある中町2丁目38番付近を含む北側一帯とするもの（註12）、



『帝都地形図』（昭和9年測量図）



『帝都地形図』（昭和14年測量図）

3 御岳山古墳

等々力溪谷左岸の台地上に立地する、径57m、高さ7mの造出付円墳である。大正年間、地元住民によって内向花文七鈴鏡が1面掘り出され、その後昭和25年には、学習院高等科史学部によって墳頂部の調査が行われ、埋葬施設の粘土槨から三角板鋌留短甲と横矧板鋌留短甲、直刀・鉄鎌・録金具などが発見されている。

平成11年に行われた目黒通り拡幅工事に伴う調査では、前方部ないし造出部の確認が期待されたが、過去の土地改変のため果たせなかった。しかし墳丘形態は造出付円墳ないし帆立貝形の前方後円墳と考えられている。主体部の調査が十分に行われていないため、詳細については不明であるが、等々力溪谷を挟んで相對峙する野毛大塚古墳の次代の首長層の墓と考えられる。首長墓としての野毛大塚を継承すると考えられる中形古墳は、御岳山古墳の東南方向に、狐塚、八幡塚、天慶塚などが一定の間隔をおいて分布している。これらの中形古墳は、いずれも5世紀代に築造され、その墳丘形態は、造出付円墳ないし帆立貝形古墳と考えられている。



御岳山古墳現況



横矧板鋌留短甲
(学習院大学所蔵)



内向花文七鈴鏡
(満願寺所蔵)